

# 「国籍」は解決したが・・・ 沖縄と台湾に流れる 時間を読む

松田良孝

(ジャーナリスト・  
2019年台湾政府外交部フェロー)



清明に合わせて共同墓地の台湾同郷之公墓に線香を供える  
於清明時期在共同墓園中的台灣同郷公墓上香  
2010年4月4日、石垣市内(筆者撮影)

## 本土復帰と日台断交

「八重山在住台湾出身者の身分処遇について」と題した文書が残されている。

1970年4月3日、石垣市議会(小底貫一議長=当時)が白保英行市議(当時)の提案で審議・可決した要請書である。沖縄県公文書館が所蔵する資料によって、10日後の13日付でランバート高等弁務官(同)に提出されたことが確認できる。

なぜこのような要請を行う必要だったのかを考えるため、沖縄の時間軸でさかのぼってみると、4カ月前の1969年11月21日に重大な発表がなされていることに気付く。1972年の沖縄復帰が日米共同声明に盛り込まれたのである。一方、台湾の時間軸では、この要請決議の1年半前に重大な「事件」が起きてい

る。国連は1971年10月25日、台湾(中華民国)に代わって中華人民共和国を中国代表とすることを決議し、その翌日に台湾は国連脱退を宣言したのである。その後、1972年9月29日には日台断交、さらに1979年1月1日には米台断交と続いていく。

沖縄が本土復帰で沸き上がっていた時期は、台湾にとっては国際社会での孤立へと向かう路線が決定的になった時期と重なる。同じ時代にあって、沖縄と台湾は異なる時間軸でもって歩みを進めていたのだ。このころ日本にいた台湾系華僑の状況について、ジャーナリストの本田善彦氏はその著書の中で『「中華民国籍の華僑は日本から追い出される」』『私有財産を禁止する中共が、日本政府に働きかけて華僑の財産を没収する』等々の根拠不明の噂が飛び交っていたと指摘している。八重山にいた台湾出身者の場合には、沖縄の本土復帰というインパクトも加わり、白保は市議会で「沖縄の日本復帰が目の前に来ている。日本語以外分からない人たちが今ごろ台湾に帰れとなった時にどうなるかと非常に心配している」と訴えていた。

## 日本国籍を取得

この重苦しい空気を打ち破ったのは、中華民国籍からの離脱を許可するとした台湾政府の決定である。日本に住む台湾系住民が日本国籍を取得する場合、その前にまず台湾の中華民国籍を離脱するというステップを踏まなければならないのだが、台湾政府は当時、国籍離脱を認めない立場を取っていた。この方針が転換され、台湾系住民は日本国籍の取得に向けて踏み出すことができるようになったのである。前出の本田氏の著書によれば、日本に住む台湾系の人たちは、「(中華人民共和国に)吸収されることを恐れ」ており、台湾政府もその心情に理解を示していたという。

八重山に住む台湾系の人たちにもこの方針転換は伝わった。石垣島では、台湾出身者178人が国籍離脱証明書を添えて日本国籍の取得を申請し、1973年から1975年にかけてそのほとんどが認められた。

## 親戚とのコミュニケーション

国籍の問題はこのように落ち着

いたものの、台湾系の人たちがなんら悩むことなく暮らせるようになったわけではない。

石垣島でマンゴーを栽培する島本哲男さん(67)は石垣島生まれの台湾系2世。数年前、台湾に叔父を訪ねたときには、同居する長男一家を連れていった。「向こう(台湾)の親戚には歓迎してもらいましたよ」と島本さん。台湾系3世でやはり石垣島出身の妻、絹子さん(64)は「(長男が台湾の親戚と)顔を合わせておいたほうがいいかなと思って連れていきました」と話す。

島田さん夫婦に限らず、八重山で暮らす台湾系の人たちは今でも生活の中で台湾語を使うことがあるが、それは世代による。台湾系とはいえ、台湾で生活経験がなく、台湾語を理解できないという人は確実に増えている。台湾に親戚がいても、互いにコミュニケーションを取ることは容易ではないという状態である。

つまり、島本さん家族のように沖縄に生活基盤のある台湾系の人たちは日本語化が進む一方で、台湾語を使う機会は特に意識しないであれば、いずれほとんど失われるか

もしれない。台湾で国語とされている中国語に至っては、能動的にアクセスしようとしなければ触れる機会はないといってよい。

これに対して、台湾で暮らす親戚とはといえば、中国語と台湾語を使う生活が定着している。日本統治期に日本語が普及した影響で、戦後しばらくの間、台湾でも日本語で意思疎通できる場面が少なくなかったが、それも過去のものとなりつつある。日本語を使える人は確実に減っている。

## ルーツ

言葉をめぐる時間の流れは台湾と沖縄の間でまったく違う。血のつながりというものがあったとしても、暮らす場所ごとに向きの異なるベクトルが働き、それぞれの方向へと押し流そうとしているのだ。

八重山で暮らす台湾系の人たちは現在、旧8月15日に合わせて石垣島の名蔵御嶽で土地神を祀る土地公祭を開いているほか、4月の清明節や旧1月16日にそろって墓参をするジュウルクニチー(十六日祭)

などが互いに顔を合わせる機会になっている。台湾語を流暢に話す台湾生まれの1世から、台湾語とはほとんどなじみのない世代までが顔をそろえる空間だ。言葉の壁は限りなく低く、顔と顔を合わせて互いに台湾系であることを再確認することができる。しかし、自らのルーツである台湾に足を運んでみると、そこには意思疎通に事欠く空間が広がっている。親たちや祖父母が生まれた場所なのに、「外国」で生まれ育った子や孫が溶け込むにはワンクッション必要なのだ。

台湾籍か日本籍かという問題が片付いてしまっても、「台湾とは何か」という問いは台湾系の人たちに思考を促し、時に煩わしさを覚えさせるのだ。

## 参考文献

- 本田善彦『日・中・台 看不見の羈絆 中国首席口譯所見の外交秘録』(日本経済新聞社/2006年)
- 島田長政「石垣島上台湾裔華僑的歸化」(嵩田公民館記念誌編集委員会編集・『嵩田 50年のあゆみ』発行、1996年、頁75-78)

## 雖然「國籍」得到了解決…… 閱讀流動於沖縄和台灣之間的時光

松田良孝 (記者・2019年臺灣外交部漢學研究中心訪問學人)

### 回歸祖國 與臺日斷交

有一份以「關於居住於八重山の臺灣出身者の身份待遇」為題的文件，至今還保存著。那是在1970年4月3日，石垣市議會(時任議長為小底貫一)在白保英

行市議員(時任)的提案下審議、表決通過的請求書。依據沖縄縣公文書館所藏的資料，可以確認該請求書於會議的10天後，也就是在4月13日被提交給了James Benjamin Lampert琉球列島高等辯務官(同事務官)。

以沖縄的時間軸回溯過去，來思考為何有必要進行這項要求，就會發現在提出申請的4個半月之前，於1969年11月21日，重大消息被發表。也就是1972年的沖縄復歸被納入了美日共同聲明之中。再從臺灣的時間軸去爬梳，在這項決議發生的一年半之前也有另一項重大「事件」發生。即聯合國於1971年10月25日，決議讓中華人民共和國取代臺灣(中華民國)成為中國代表。隔日，臺灣

向大會宣告退出聯合國。隨後，1972年9月29日臺日斷交。1979年1月1日臺美也接續宣布斷交。

沖繩因祖國復歸而沸騰的時期，正巧與臺灣將在國際社會裡走上孤立無援道路的時期重疊。在同一個時代裡，沖繩和臺灣各自以不同的時間軸邁出了新的步伐。關於這段期間在日台灣裔華僑的情況，記者本田善彥在其著書中指出「『中華民國籍的華僑從日本被趕出來』、『禁止私有財產的中共，對日本政府將施加壓力沒收華僑的財產』等等來源不明的謠言四起」。在八重山的臺灣出身者，受到所謂沖繩祖國復歸的衝擊，白保在市議會中曾說：「沖繩的日本復歸近在眼前。現在這個時間點若要遣送只懂日語的這些人回臺灣，他們將會怎麼樣？非常令人憂心。」

## 取得日本國籍

臺灣政府批准他們放棄中華民國國籍的決定打破了這個氣氛凝重的僵局。居住在日本的臺灣裔人士若欲取得日本國籍，首先必須放棄在臺灣的中華民國國籍，依據這樣的步驟辦理手續。然而，當時的臺灣政府，採取了不承認放棄中華民國國籍的立場。但因這個決策方針的轉換，促使臺灣裔獲取日本國籍的過程得以順利進行。根據前文引用的本田著書中也提及到，居住在日本的臺灣裔抱持「深怕被（中華人民共和國）接收」的心情，臺灣政府是能理解的。

居住於八重山的臺灣裔也被告知了這個方針轉換。在石垣島，178名臺灣出身者隨附國籍放棄證

明書，提出了日本國籍的取得申請。從1973年到1975年間，幾乎全數獲得許可。

## 親戚之間的溝通

雖然國籍的問題找到了解決之道，但並非臺灣裔就從此無憂無慮地生活。

在石垣島栽種芒果的島本哲男先生（67歲）是生於石垣島的臺灣裔第二代。多年前，到臺灣拜訪叔父時，也帶了同居的長男一家一起去。「那邊（臺灣）的親戚很歡迎我們」，島本先生這麼說。臺灣裔第三代的妻子絹子女士（64歲），同樣石垣島出身。她說，「我覺得彼此（長男與臺灣的親戚）見個面比較好，所以就帶他們一起來了。」

不只是島本伉儷，八重山的臺灣裔雖然至今仍有人會在日常生活中使用臺語，但是整體還是因世代而異。儘管是臺灣裔的後代，不僅從來沒有在臺灣生活的經驗，也無法理解臺語的人確實越來越多。就算在臺灣尚有親戚，要進行溝通也非易事。

也就是說，就如同島本家族，在沖繩有生活基礎的臺灣裔後代逐漸日語化之時，若不特別留意，終究會完全失去使用臺語的機會。至於在臺灣普遍使用的「國語」，如果不主動去接觸，可以說幾乎是沒有接近的機會。

相對於此，在臺灣的親戚生活上已經固定使用國語及臺語。日語在日治時期普及的影響下，戰後曾有一段時間在臺灣使用日語也能溝通的場景並不少見；然而，這已經成為過去，會日語的人確實正在減少。

## 根源

圍繞著語言的時間流變，在臺灣與沖繩之間是全然不同的。就算有血緣牽繫在一起，不同的生活場域就有不同的向量作用著，也將他們帶往各自迥異的方向。

現在生活在八重山的臺灣裔人士，除了於農曆8月15日會在石垣島的名藏御嶽舉辦祭祀土地神的土地公祭以外，4月的清明節以及及農曆1月16日進行掃墓的十六日祭，成為了大家相聚見面的機會。無論是能流暢地說臺語的臺灣移民第一代，還是對臺語幾乎陌生的世代，都會齊聚一堂。他們之間沒有太多語言的隔閡，面對面便能認出彼此都是臺灣移民的後代。然而，去到自己的原鄉臺灣，那裡卻滿溢著無法溝通的不自由空間。臺灣雖然說是雙親或是祖父母的出生地，但對於生長在「外國」的子孫而言，還是需要一點「緩衝的餘地」才能融入其中。

即使「臺灣籍或是日本籍？」這個問題得到了解決，「何謂臺灣」這個提問依然促使臺灣裔人士的思考，時而也令他們煩心。



石垣島に住む台湾系住民が、日本国籍を取得する目的で交付を受けた国籍離脱証明書（複写・芳沢佳代さん提供）  
住在石垣島的台灣裔住民為了取得日本國籍所領取的國籍脫離證明書（影本・芳澤佳代提供）